様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２６日現在

機関番号：３２５２１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０３３７
研究課題名（和文）１８・１９世紀の日中比較文学研究－頼氏・齋藤拙堂・眞龍院を中心に－

研究課題名（英文）A STUDY OF COMPARATIVE LITERATURE IN THE 18th AND 19th CENTURY, ESPECIALLY CONCERNING THE RAIS, SAITO-SETSUDO, AND SHINRYU-IN

研究代表者
直井　文子（NAOI FUMIKO）
東京成徳大学・人文学部・准教授
研究者番号：３０２４２３４０

研究成果の概要（和文）：　本研究で文学性を探ることを目的とした18・19世紀の日本の漢詩文作家で世にあまり知られていない7名（頼春水・春風・杏平・亨翁・山陽、齋藤拙堂、眞龍院）の内、初年度はまず頼春水の漢詩に表れた「孤独感」を論文にまとめた。第2年度には頼春水の弟である頼杏坪の「老」・「閑」に対する意識を、また春水の息子の頼山陽の作品中の「狂」字の用い方と自意識とを論文にまとめた。第3年度には加賀前田家藩主夫人である眞龍院の旅日記中の漢詩を分析して論考にまとめた。他の3名も含め、引き続きこの7名と中国の文人との比較を検討中である。

研究成果の概要（英文）：In the first year, I wrote a paper about the topic of loneliness in the poetry of RAI-Shunsui, whom I selected from among seven relatively unknown writers (RAI-Shunsui, Shunpu, Kyohei, Kouou, Sanyo, SAITO-Setsudo, Shinryu-in) of Chinese poetry in the 18th and 19th centuries whose literary essence I wished to research. In the second year I wrote two papers: one about Rai-Kyohei's view of "老" (aging) and "閑" (vacancy) and the other about RAI-Sanyo's view of "狂" (eccentricity). In the third year I wrote a paper about the Chinese poems in the travel diaries of Shinryu-in who was the wife of the master of the Maeda Clan in Kaga. Including the other three people mentioned above, I am continuing to do research on a comparison between these seven writers and other Chinese literary figures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：日本漢文学
科研費の分科・細目：各国文學・文学論
キーワード：日本漢詩文、頼春水、頼杏坪、頼山陽、眞龍院、齋藤拙堂、江戸後期、比較文学

１．研究開始当初の背景

日本人の作った漢詩文については近年、国内外の関心が高まり、二松学舎大学がそのＣＯＥ事業の拠点になるなど、研究者や業績も増えつつあった。従来、平安朝の漢詩と和歌との関係については先達の業績があり、総じて白楽天等の中国の文人の影響などから考察する研究が進んでいた。しかし近世の日本

人の作品と中国の作品とを本格的に比較考察するものは、非常に少なかった。しかも近世日本の漢詩文には、まだ発掘されていないものが相当数あると考えられた。今回取り上げた7名は､様ざまな立場で漢詩作品を遺し、それが一般的にはあまり知られておらず、正当な評価も受けているとは言い難い人びとで、女性も含まれており、中国の文人と比べる意義があると考えられた。

２．研究の目的

本研究は、18 世紀から 19 世紀にかけて日本で漢詩文を創作し、優れた作品を遺しながら世にあまり知られていない 7 名乃至 9 名の作品を探索し収集し、その文学性と作者の意識とを探り、中国の文人と比較し、更に和歌と漢詩という異なる文体の相互関連性を探ろうとするものである。

広島を中心として活躍した頼春水・春風・杏坪の三兄弟とその父の亨翁、春水の息子で京都へ出た頼山陽、伊勢の齋藤拙堂、加賀の第 12 代藩主・前田齊廣の未亡人眞龍院について、その漢詩文と和歌とを探索し収集し、そこに表された文学意識を考察し、中国の文人と比較し、時代性・地域性・国民性の相違・相似、彼らの独自性等を明らかにしようとする。更に、頼亨翁・春水・春風・杏坪の 4 名は、「漢詩文と和歌とで韻を踏む」という試みをしており、その行為に作者のどのような意図が込められ、作品にどう反映されているのかをも探求する。更に余力があれば、頼春水と同時代の中井履軒、頼山陽の子の三樹三郎や齋藤拙堂と交友のあった羽倉簡堂の埋もれた著作を発掘し、その文学意識を探求し、前 7 名と時代的関連性を考察したい。

３．研究の方法

まず広島を代表する儒学者の家として頼家に焦点を当て、特に頼春水・春風・杏坪の三兄弟、その父の亨翁、春水の長男山陽の全著作の把握に努め、彼らの文学性と文学意識とを探った。

頼宗家に伝わる資料は、平成11年の頼惟勤氏の逝去後、広島市中区にある頼山陽史跡資料館に寄贈されたため、通信による目録の入手は可能であったが、実際に現地に赴き、内容を調査した。

また春水と弟の杏坪が編纂した大部の『與樂園叢書（与楽叢書）』は、数種類が広島市立中央図書館に保管されており、その中に春水兄弟の未刊の詩文集も含まれている。この叢書については頼惟勤氏の調査があるが、現在どのように整理されているかは、実地調査した。その上でマイクロフィルムからの複写を依頼し、内容の読解と分析とを行った。この為に数回、広島と東京都の間を往復した。

収集した作品を読み進める上で、主要な語彙につき、コンピューター上で中国の作品との相関を調べるため、「四部叢刊CD－ROM」を使用し、語句の検索等を行った。使用語句からある程度の影響関係を考察した。検索の結果、特に類似の語彙を使用する中国の作家が浮かび上がれば、優先的にその文学性を比較した。また同時代の明清の作家の中から、塩業の盛んな土地として広島・竹原と共通性のある、揚州の作家達との比較を試みた。

取り寄せた資料に関して、専門的知識の供与、その整理、ファイリングなどに謝金を用い、1名程度の人員を確保した。

４．研究成果

(1)　本研究の目的である18・19世紀の日本の漢詩文作家で、世にあまり知られていない7名の内、初年度はまず広島を代表する儒学者の家としての頼家、特に長男の頼春水の全著作を把握し、その文学性と文学意識とを探ることに努めた。頼宗家に伝わる資料は、平成11年の頼惟勤氏の逝去後、広島市中区にある頼山陽史跡資料館に寄贈されたが、春水と弟の杏平が編纂した大部の『與樂園叢書』は、数種類が広島市立中央図書館に保管されており、その中に含まれる春水兄弟の、未刊ながらほぼ全作品を網羅していると思われる詩文集を調査する必要があった。この叢書については頼惟勤氏の調査があるが、現在どのように整理されているかとその内容の詳細とを、現地へ2度赴いて調査した。部分的に複写も依頼し、読解を進めた。また竹原市にある春風館は、頼春水・杏坪が広島へ移住する前の先祖代代の居住地であるが、一般には非公開で未調査である。

収集した作品を読み進める上で、主要な語彙を中国の作品と比較するため、「四部叢刊CD－ROM」を購入した。しかし語句の比較・検索に至る前に、他者との関係なく生まれたと思われる作品を中心に「孤独」という面が浮上し、まず春水の詩に表れた「孤独感」を考察した。そこで語彙上で中国の詩人のとの関連を見るよりも、同時代の明清の作家の中から春水と社会的立場などが似ている詩人で、塩業の盛んな土地として広島・竹原と共通性のある、揚州の作家として阮元との比較が考えられた。阮元の詩文集は公刊されており、購入できるものは購入し、比較を試みたが、全体的な論考は後日に継続し、ひとまず春水の「孤独感」のみを論文としてまとめた。

(2)第2年度はまず、前年度に研究した賴春水の弟である賴杏坪の作品の把握・読解に努めた。その結果、前年度に複写を入手した、広島市立中央図書館蔵の『與樂園叢書』に含まれる賴杏坪の作品は意外に少なく、むしろ故・賴惟勤氏旧蔵の『春草堂詩鈔』に杏坪の詩作品の大半が含まれており、それらと刊本『春草堂詩鈔』所載作品との関係や内容の検討をすべきであると判明した。そしてその考察結果を論文「賴杏坪の詩」として、「老」・「閑」に対する杏坪の意識をまとめた。

(3) 賴山陽については『賴山陽全書』が既に公刊されており、賴山陽史跡資料館に寄贈された資料の内にも断簡はあるが、主として公刊されたテキストにより、読解と分析とを行った。最近は日本漢詩文に関しても、1字検索のできるDVDが次々に発売されており、『賴山陽全書』のDVDも発売されている。山陽の作品中の＜狂＞字の用い方を分類して考察し、論文「賴山陽の＜狂＞」としてまとめ、佐藤保・宮尾正樹編『鳳よ鳳よ―中国文学における＜狂＞』に収めた。

(4) 三重県津市では近隣の大学・高校・図書館等の機関の教職員や大学院生などにより、「齋藤拙堂研究会」が継続的に開催されている。その例会に出席し、『拙堂文集』所載の漢文作品を読み、研究上の情報交換等を行った。齋藤拙堂の著作としては、これまでに公刊或いは紹介されているもの以外、新たな資料は発見されていないと言ってよい。そこで旧稿に新たに作者についての解説を付し、論文「齋藤拙堂の＜狂＞」を『鳳よ鳳よ』（同上）の中の1篇として収めた。

(5) 石川県金沢市立玉川図書館近世史料館には、眞龍院の江戸から初めて加賀へ旅した際の日記『越乃山ふみ』の写本が所蔵されている。原本の所在は未詳の為、現地へ赴き、この写本を調査し、複写を入手した。その結果、眞龍院の漢詩作品は、この旅日記に載っている5首のみと思われ、漢詩作者として評価するには、あまりにも作品数が少ないことが判明した。眞龍院の文学意識はほとんど和歌によって表されていると考えられるが、その漢詩の用語を検討することにより、どのように漢詩文を勉強し漢詩を創作したのかを探る余地はあると考えられ、四部叢刊CD-ROMの検索機能を駆使して、中国文学との関連性を考察した。そして特定の作家や作品との深い結びつきは見いだせなかったが、作者の幅広い教養と豊かな知識、漢詩の作法を確かに身に付けた様子が伺えることなどを、「前田斉広夫人真龍院の漢詩」としてまとめ、本務校の研究紀要に発表した。

(6) 上記に並行して、春水・杏平・父の亨翁・息子の山陽・妻の梅颸らのアンソロジー『十旬花月帖』を読み、和歌と漢詩との押韻問題を検討している。引き続き賴氏三兄弟と山陽、齋藤拙堂については中国の文人との比較を検討中である。

(7)本研究のここまでの成果は、賴春水、賴杏坪、賴山陽について、従来の彼らとその作品に対する評価とは別の面を見出せたことであると思われる。また真龍院に関しても、数少ない女性作家の漢詩作品を分析し、語彙の面から検討できたことで、学者や文人の家庭にある女性のみならず、他の同じような立場（大名の奥方など）の女性作家の存在の可能性に期待が持てるようになった。今後は上記の(6)のように、残している課題の検討を継続しつつ、また新たな日本漢詩文の発掘に努めたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 直井文子、前田斉広夫人真龍院の漢詩、賴春水の詩、東京成徳大学研究紀要―人文学部・応用心理学部―、査読有、第 18 巻、2011 年、170(1)-164(7)

② 直井文子、賴杏坪の詩、東京成徳大学研究紀要―人文学部・応用心理学部―、査読有、第 17 巻、2010 年、188(1)-179(10)

③ 直井文子、賴春水の詩、東京成徳大学研究紀要―人文学部・応用心理学部―、査読有、第 16 巻、2009 年、166(1)-157(10)

〔図書〕（計１件）
佐藤保・宮尾正樹編、直井文子、他共著、汲古書院、鳳よ鳳よ―中国文学における＜狂＞―、2009 年、240 頁（内 145-168 頁、賴山陽の真「狂」）、（169-183、齋藤拙堂と「狂」、再録）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.tsu.ac.jp/bulletin/pdf/18/16

4-170.pdf

http://www.tsu.ac.jp/bulletin/pdf/17/179-188.pdf

http://www.tsu.ac.jp/bulletin/pdf/16/157-166.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者

直井　文子（NAOI FUMIKO）

東京成徳大学・人文学部・准教授

研究者番号：３０２４２３４０

(2)研究分担者

無し　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

無し　　（　　）

研究者番号：